OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	スケープゴーティング現象の定義とメカニズム
Author(s)	釘原, 直樹
Citation	対人社会心理学研究. 2014, 14, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/36099
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

スケープゴーティング現象の定義とメカニズム

釘原直樹（大阪大学大学院人間科学研究科）

スケープゴーティングとは、何らかのネガティブな事象が生起、あるいは生起が予見されている際に、事態発生や拡大・悪化に関する因果関係・責任主体が不明確な段階で、原因や責任をある対象に帰属したり、その対象を非難することが、一定の集合的広がりをもって行われることである。また因果関係の枠外にある対象に対する責任帰属や非難、そしてそのような認知や行為が共有化されていくプロセスもスケープゴーティングに含める。このスケープゴーティングにおいて、対象となるものをスケープゴートと呼ぶ。ここでは、スケープゴーティングの発生プロセスに関するモデルを構成し、さらにスケープゴーティングを促進するマスメディアの報道特性やスケープゴートの時間経過による変遷プロセス（波紋モデル）について述べる。

キーワード: スケープゴート、マスメディア、波紋モデル、非難攻撃、欲求不満攻撃理論、防衛機制

スケープゴートの意味

災害や事故で大きな被害が出た時、あるいは不正行為や犯罪が明らかになった時、マスコミによる集中豪雨的な報道がなされることがある。そして往々にして、悪者探しが行われ、何が原因であるのかより誰が悪いのかが追及される。すなわち、責任主体が不明確な場合でも特定の人や集団がターゲットとして選び出されて非難されることもしばしばである。これは、人が曖昧な状況やフラストレーションに長時間は耐えきれず、早急に責任者を選び罰することによって心の安寧を回復しようとするためであると考えられる。このような現象がスケープゴーティングであり、その対象となったものがスケープゴートと呼ばれる。

様々なスケープゴーティングが考えられる。例えば「いじめ」である。いじめられっ子の存在により学級の安寧が保たれている可能性があるため、その子がいなくなれば、別の子が対象として選び出される可能性が高い。それからいわゆる「バッシング」もスケープゴーティングの一種だと考えられる。子どもが自殺してそれがいじめによるものと認定されると、教師や校長に対する執拗な非難攻撃が繰り返される。「戦犯探し」もこの範疇に入るであろう。プロ野球やサッカーで成績が振るわなかった場合、お家騒動が起こり、監督やコーチが詰め腹を切らされることが多い。本稿ではそのようなスケープゴートの発生条件や対象、心理メカニズムについて述べる。

汚れと美学

スケープゴートという言葉は古代贖罪の日に行われていたユダヤ人の儀式に由来する(Gollwitzer, 2004)。それは旧約聖書の一部のレビ記「そしてAaronは生けるヤギの頭の上に両手を置き、ユダヤ人のすべての悪行、犯罪、宗教上の罪を告白するであろう。そして、彼はヤギの頭に罪を被せ、荒野に追いやるであろう。」にも記載されている。この日には2頭の山羊が引き出され、そのうちの一頭は神の生贄となり、もう一頭は人々の罪を背負わされ荒野に追いやられたということである。後者をスケープゴートと称した。このような考え方は精神分析学の防衛機制の中核的メカニズムのひとつである投影の中にも見られる。それは無意識の中にあって意識化されようとすると不安に陥るような、忌まわしく、邪悪で、恥ずかしい思考や感情を他者や他国や弱者に押しつけて、自分の中にそれがあることを意識せずに済ませようとするメカニズムである。これにより自分は正しく、落ち度がなく他者が一方的に悪いことになる。そして当人は自分の中の忌まわしいものから解放されて自分を理想化できる。この言葉の由来が示すように、スケープゴートは他者の罪をかぶり「汚れた者」のニュアンスが強い。その典型例として、よく挙げられるのが、ナチスドイツのユダヤ人に対するジェノサイド、中世ヨーロッパにおける魔女狩りなどである。

それでは辞書の記述はどうであろうか。例えば、岩波英和大辞典（1969)には「他人の罪を負う者、身代り、犠牲者」との説明がなされている。この説明から類似の言葉に「身代わり」があることがわかる。「身代わり」に関しては、わが国には様々な美談がある。例えば、徳川家康と武田信玄の三方原の戦いでは、敗走する徳川方のある家臣が家康の兜と馬を貰い受け、武田方に自分を家康と思い込ませ「身代わり」になり討ち死にすることによって、家康の逃亡を助けたという話がある。また主君(源満仲)から素行不良の主君の子の殺害を申し渡された家臣が、その子の身代わりに自分の子を殺し、主君の子の首として偽り、それを届け、主君の子を救ったという物語もある(謡曲仲光)。これは義理と人情の板挟みに苦しみながら、自分の子を犠牲にすることによって義理を通した武士の美談として描かれている。

また「身代わり」から連想される言葉に「人身御供」がある。人身御供は「①昔、生きた人間を生けにえとして、神に供えたこと、また、その人。②他人の欲望を満足させるために犠牲となる人」（旺文社国語辞典,1964)と解説されている。犠牲になるのは大抵、純真無垢な若い女性や子

どもである。辞書上の意味はスケープゴートと人身御供とはかなり類似している。ただし、後者の場合は前者と異なり、対象者が「汚れた者」というニュアンスはなく、どちらかといえば「美化されるような存在」である。また前者は主に無意識レベルのメカニズムを含んでいるのに対して、後者は意識された行動である。

それから「やり玉に上げる」という言葉もある。これは「多くの中から選びだして非難・攻撃や犠牲の目標にする」(旺文社国語辞典,1964)ということである。この言葉を受動態の形にすればスケープゴートとほとんど意味が同じと考えられる。ただし、「やり玉に上げられる」場合は、ある程度、実際の(正当な)責任があるのに対してスケープゴートの場合は、全く理不尽に汚名が着せられ非難されるというニュアンスがある。実際には理不尽と正当の基準や区別は曖昧であろう。スケープゴートと当然の非難対象をどのように区別するのか、区別する基準は何かについて、未だ明確な結論を出すには至っていない。

いずれにせよ、スケープゴートと類似の言葉はいくつかあるが、スケープゴートとやり玉以外の言葉はどちらかといえばポジティブなニュアンスが感じられる。他者や他集団の犠牲になった者の中に美点を見出すか汚れを見出すかによって、使用される言葉が異なるものと考えられる。

スケープゴーティングの心理学的定義

心理学的定義も上述の内容とほぼ同じである。例えばAllport(1979)は「スケープゴーティングは一種の防衛機制であり、自分自身を不安にさせる思考や衝動を誰かに帰属させることである」と述べている。また Adorno, Frenkel-Brunswik, Levinson, & Sanford(1950)も無意識の側面を強調している。彼らは「社会規範を守らなかった人に罰を与えたいという願望はそれとは無関連の子どもの時の葛藤に由来する抑圧された敵意に基づく」と述べている。さらに、Gollwitzer(2004)は「スケープゴーティングは個人が自分の中にある邪悪な思考や感情(不安、罪悪感、影、低能力、劣等感)を他の弱者に投影することである。それにより、自分を理想的人間であると思い込むことができる。」と述べている。以上の研究者に共通するのは、スケープゴーティングを精神分析学における防衛機制、特に投影や置き換えのひとつの形態としてとらえていることである。

この考え方を継承して、スケープゴートとなる対象の不当な選出について特に強調している研究者もいる。例えば Rothschild, Landau, Sullivan, & Keefer(2012) は「集団や社会に害をもたらしたと思われる特定のターゲット(個人や集団)を非難したり罰することである。そしてその害の大部分は他の原因に由来するものである。スケープゴートはこのターゲットのことである。」と述べている。また Glick(2005)は「根拠が曖昧であるにもかかわらず、内集団の中で起きた不幸を外集団が意図的に引き起こしたとして、その責めを負わせる、言わば偏見の極端な形態である。」としている。さらに Veltfort & Lee(1943)は「スケープゴートは個人や集団の攻撃エネルギーが集中的に他の個人や集団に向けられる現象である。その攻撃量は当人が受けた被害量に比べて異常に高い。対象の選択とその対象に対する攻撃は部分的に、あるいは全く不当である。」と述べている。

一方、Tajfel(1981)のようにスケープゴート現象を無意識の情動や攻撃衝動ではなく、通常の社会的アイデンティティーや認知プロセスとして捉える研究者もいる。彼はまた、個人ではなく集団で共有された欲求不満が集団成員に共通するスケープゴートを生み出すとしている。

さらに、Drabeck & Quarantelli(1967)のように責任追及や非難の合理的側面について述べている研究者もいる。彼らは、責任追及が将来の起きる災害を未然に防ごうとするために行われこと、そのため人間の力が及ぶと思われる範囲が考慮されること、責任者を罰することが立ち直りや回復を後押しする可能性があることを強調している。

以上の内容を考慮して、ここでは何らかのネガティブな事象が発生、あるいは発生が予見されている際に下記の現象が生起する場合、これをスケープゴーティングと定義することにする。

1) 事態発生や拡大・悪化に関する因果関係・責任主体が不明確な段階で、それをある対象(場合によっては因果関係の枠外にある対象)に帰属したり、その対象を非難する。

2) 責任帰属や非難が一定の集合的広がりをもって行われ、そのような認知や行為が共有化されるプロセスがある。

そして、このスケープゴーティングにおいて、対象となるものをスケープゴートと呼ぶ。1)に関しては意識レベル、あるいは無意識レベルのメカニズムが働いていることが考えられる。また2)に関してはスケープゴーティングを行う側とされる側の両方とも個人の場合もあるかもしれないが、今日では主に、両者とも複数の人がかかわる集合現象としてとらえようとするものである。

スケープゴーティングの心理—特定のターゲットに対する非難・責任追及のメカニズム

ここではスケープゴーティングの主要動機と発生したスケープゴーティングを促進する要因について取り上げる。図1はスケープゴーティング発生過程の全体を示したモデルである。図中の(A)と(B)は動機要因である。それから(C)～(G)は促進要因である。さらにこのモデルの中には示されていないが、これらの要因を活性化させ触発す

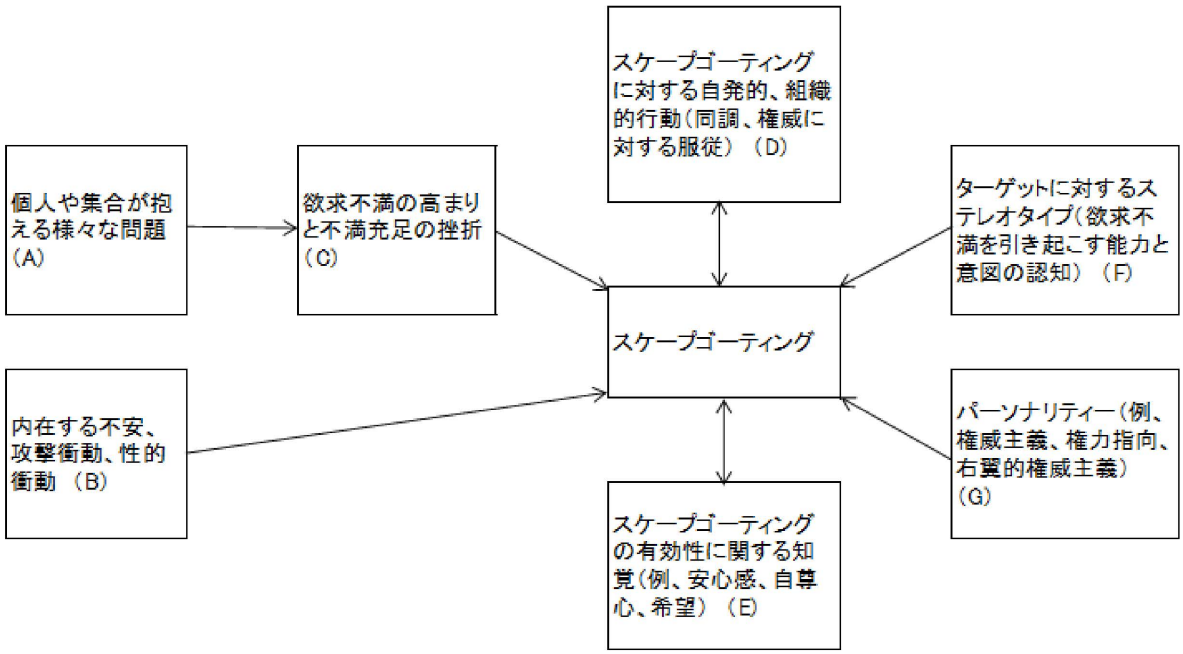

図1　スケープゴーティングの発生過程モデル

るものとしてマスメディアの存在が考えられる。そのためにマスメディアの報道内容の変化によって、スケープゴーティングの程度や質が変動することが考えられる。ここでは動機要因、促進要因、マスメディアの報道特性、スケープゴートの時間経過による変遷プロセス（波紋モデル）について順番に述べることにする。

スケープゴーティングの動機に関する理論（精神分析理論 vs 欲求不満攻撃理論）

Allport(1979) は内的な罪の意識の存在（図中の B)を仮定する精神分析学的理論と内的な罪の意識の存在を仮定せず、社会や集団内で発生するフラストレーションの存在(図中の A)を重視する欲求不満攻撃理論の両方を提示した(Glick, 2005)。精神分析理論によれば、先述したように、スケープゴーティングは自分の中にある邪悪な思考や感情(不安、罪悪感、性的欲望、低能力、劣等感)を抑圧し、またそれを他者に投影することによって、解消しようとする無意識の試みであると説明される。すなわち、抑圧や投影という防衛機制のひとつの形態と考えられる。フロイトは欲求不満と罪の意識は個人の本能衝動（イド=性や攻撃)の社会による抑圧の結果として生じると考えた。社会秩序を守るためには、人は衝動を抑圧し社会的に是認される振る舞いをするように社会化(主に両親によって)される必要がある。このような拘束が内在化されたものが良心であり、良い行いを強いる超自我が形成されると考えられる。過度な躾は超自我とイドの本能衝動の継続的葛藤を生み出す。そして、超自我は些細な衝動でも許容し難いものとして抑圧するのである。その結果、欲求不満や罪の意識、攻撃衝動が膨らみ、破裂し発散されることになる。発散先はそのような衝動が投影された他者となる。ユダヤ人が金銭欲が強いと思われるのは、キリスト教徒に内在する金銭欲が抑圧され、投影されたためであると考えられる。また以前、白人は黒人の性欲が強いと思っていたということである。これも白人自身の中にある性欲が抑圧され、黒人に投影されたものと考えられる。このようなプロセスがスケープゴーティングの背景であると考えるのである。

一方、欲求不満攻撃説(Dollard, Doob, Miller, Mowrer, & Sears,1939)も精神分析理論と同様に様々な欲求が行動の形で発散されるとする。異なるのはこの理論は攻撃を内的衝動から引き起こされたものではなく目標追求行動を妨害するような環境(外的条件)に対する反応として捉えている。外的条件によって引き起こされた欲求不満はそれを引き起こした対象に攻撃を向けることによって解消される。ただし、精神分析理論と同様に欲求不満を引き起こした対象が強力で報復される可能性がある場合、攻撃は無実の対象に向けられると考えた。

この2つの理論は重複している部分もある(Glick, 2005)。両理論とも置き換えと投影を理論の中核に置いている。しかし精神分析学的アプローチは「直接的投影」というのを強調している。それは個人が所有している是認し難い衝動が他者に投影され、その結果、自分にはそのような衝動がないと思ってしまうメカニズムである。直接的投影は置き換えだけでなく抑圧（自分の中には邪悪な欲求がないと認識する)といった複数の防衛機制がかかわる。一方、欲求不満攻撃理論では「補償的投影」になる。これは当人が意識している感情を裏返した形(例えば、私はあな

たが憎い、だからあなたは私を嫌っているはずだ)で投影するものである。欲求不満の原因は目標追求が阻止されたことによって引き起こされた外的なものなので抑圧の必要はない。両理論ともスケープゴートとなった個人や集団を実際よりも蔑む。スケープゴートは投影スクリーンになっていると考えられる。

要するに、スケープゴーティングに関する精神分析学と欲求不満攻撃理論の違いは欲求不満が内的な精神力動的葛藤から来るものか、あるいは目標追求行動が阻止されることに由来する外的原因から来るものかによる。ただし両理論とも1)欲求不満の原因に対する攻撃は禁止されている、2)攻撃は、報復の恐れがない他者に置き換えられる、3)スケープゴートのネガティブなステレオタイプは投影や合理化の結果生じる、とする。

精神分析理論に関する実証的研究

このようにスケープゴーティングは主に上記の2つの理論から説明されている。しかしどちらも無意識レベルの現象を主に扱っているため実証的研究はほとんど行われていない。その中で Gollwitzer(2004)はシナリオ実験(場面想定法)による検証を行っている。先述したように精神分析理論によれば攻撃は自分自身の非道徳的欲求の他者に対する投影が背景にあるとする。そのため、スケープゴート仮説によれば虞犯者(犯罪的傾向を持つ人)は犯罪者に対してより厳しい罰を与えることが考えられる。一方虞犯者は逆に犯罪者や犯罪行為に寛大になることも考えられる。それは過去あるいは将来、当人がそのような犯罪行為をしたか、する可能性があるためである。これを非難回避動機説として、両説の妥当性の比較研究が行われた。具体的な手続きとしては、まず、実験参加者は次のようなシナリオを読むように要請され、さらに、その物語の主人公として自分をみなすように指示された。物語としては、シャツの万引き、地下鉄の無賃乗車、保険会社に対する嘘(自転車盗難に関する)の申請、盗難品(テレビ)の購入、宿題の剽窃、などであった。実験参加者は違法行為がバレないような状況では法令に違反する行動をするかどうか、過去にそのようなことをしたかどうか、また意思決定をする時にどの程度迷うのかが尋ねられた。その後、上記の状況と同じ状況で罪を犯した者に与える罰の程度(罰金や宿題の剽窃の場合は居残り時間)を判断するように要請された。実験の結果、虞犯者は犯罪者に与える罰の程度が少なく、犯罪に対して寛大であることが示された。これはスケープゴート説ではなく非難回避動機説を支持する結果であった。この実験では精神分析学的スケープゴート説は否定されたことになる。ただし、この実験は意識レベルの現象を扱ったものである。

これに対して Adams, Wright, & Lohr(1996)は無意識レベルであれば精神分析学的スケープゴート理論が検証可能なことを示した。これは同性愛に対する偏見や嫌悪が潜在的同性愛傾向に由来することを明らかにしたものである。意識のレベルでは同性愛は非道徳的だと認識しているにもかかわらず、同性愛衝動傾向を潜在的に持っている人は、このような欲求が自分の中にあること認識して自己嫌悪になることを避けるため、それを他者に投影するのである。この実験ではまず男性実験参加者の同性愛者恐怖症(異性愛の男女が同性愛の男性や女性に近接すると恐怖心を抱いたり不安や嫌悪を感じたりする症状)が測定された。同性愛者恐怖症の程度が高い男性は、同性に対する性的欲望を抑圧し、同性愛者にその無意識の欲望を投影するために、同性愛者を嫌悪することが考えられる。同性愛者恐怖症質問項目(5 段階尺度)は次のようなものであった。「男性が色目を使ってきたら私は怒りを感じる」「自分の子どもがゲイであることがわかったら、私は自分が親として失格だと思う」「男同士で公衆の面前で手をつないでいるのを見たら、嫌な気持ちになる」。それから実験参加者には 3 種類(男女のカップル、男性のカップル、女性のカップル)のエロチックな映像(合意の上での性的行動)が提示された。上映時間はそれぞれ 4 分間であった。映像は前戯(キス、脱衣)、フェラチオ、性交と進んでいった。実験参加者は防音室に案内され、実験について説明を受けた。実験参加に同意した者だけを対象に実験が続行された。実験室には快適なリクライニングの椅子があった。そして、性器に装着する器具についての説明を受けた。実験者が実験室から退出した後で性器に器具を装着した。器具は輪ゴムのような形状をしていて、性器の膨らみの変動に従って伸縮し、それを電気信号として継続的に捉えるものであった。実験の結果、男性カップルのエロチックな映像に顕著な生理的反応を示したのは、同性愛恐怖症の程度が高い実験参加者であった。しかし質問紙による調査では、彼らは勃起や性的興奮を経験したとは思っておらず、意識のレベルでは興奮したという認識はなかった。同性愛恐怖症が強い男性は生理的レベルと意識レベルではズレが生じたのである。この研究の結果、自分は異性愛だと公言し、同性愛者を嫌悪する男性の反同性愛的態度の強さは、同性愛セックスのビデオを見たときの性器の勃起と相関することが見出された。同性愛衝動が抑圧され、その自己嫌悪は他者に対する敵意に変換されることを示したのである。

欲求不満攻撃理論に関する実証的研究

次に欲求不満攻撃仮説を検証した研究をいくつか取り上げる。Hovland & Sears (1940)はアメリカ南部における経済的要因(綿花の価格の変動)と攻撃行動(白人の黒人に対するリンチ件数)に関連があることを示した。図 2 の 2 番目の図は 1882 年～1930 年までのアメリカ南部の綿花

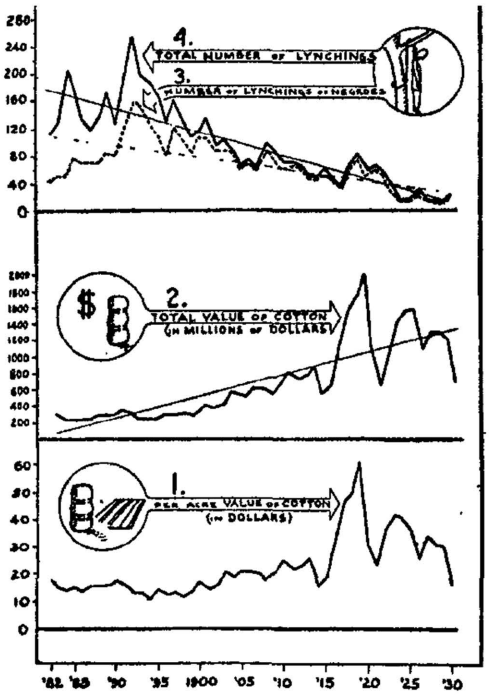

図2　アメリカ南部における綿花価格とリンチ件数との関係
(Mintz(1946)より引用)

価格の総額である。それから一番上の図は実線が全体のリンチ件数であり点線が黒人に対するリンチ件数である。綿花価格と黒人へのリンチ件数にはマイナス 0.72 の高い負の相関が見出された。これは経済的原因による欲求不満がスケープゴートである黒人へ投影され、彼らに対する攻撃行動として解消されていると考えることが可能である。ただしこれについてはいくつかの批判がある。例えば、綿花価格の変動は 1915 年頃から大幅に上昇していて、直線ではないので、このような単純な分析でよいのか、という批判である(Mintz,1946)。また、全く何の関係もない時系列データの間に、なんらかの相関が見られることもありうる。例えば当時のアメリカのリンチ発生件数とドイツの出生率や大陸をつなぐ客船の速度には相関があった(Mintz,1946)。ただし、その後の研究で失業経験、人口密度、経済状況などのフラストレーション関連変数と攻撃行動が関連することを示唆する研究もある(Green, McFalls, & Smith, 2001)。このように社会事象を分析することはひとつの有力な方法であるが、因果関係を明確にするためにはやはり実験的研究が必要となる。

報復攻撃の対象が欲求不満の源ではなく、他のものに向けられる置き換えはスケープゴーティングの中核的メカニズムである。そして、われわれはある意味でこれを日常的に行っている可能性がある。例えば、上司から叱られたサラリーマンが家に帰るなり奥さんに当たり、奥さんは子どもを叱り、子どもは猫を蹴飛ばすといった連鎖が生じるかもしれない。このような現象は次のような小説にも描かれている(中島敦　李陵　文春文庫)。この小説では司馬遷について描かれている部分がある。司馬遷は匈奴を討伐しようとして捕虜になった李陵を弁護したことによって、武帝の怒りを買い宮刑(去勢の刑罰)に処せられる。その直後、司馬遷は次の様な状態になる。

痛憤と煩悶との数日のうちには、ときに、学者としての彼の習慣からくる思索が──反省が来た。いったい、今度の出来事の中で、何が──誰が──誰のどういうところが、悪かったのだという考えである。……当然、彼はまず、武帝を怨んだ。一時はその怨懣だけで、いっさい他を顧みる余裕はなかったというのが実際であった。しかし、しばらくの狂乱の時期の過ぎたあとには、歴史家としての彼が、目覚めてきた。……武帝の評価の上にも私怨のために狂いを来せることはなかった。なんといっても武帝は大君主である。そのあらゆる欠点にもかかわらず、この君がある限り、漢の天下は微動だにしない。……司馬遷は極度の憤怨のうちにあってもこのことを忘れてはいない。今度のことは要するに天の作せる疾風暴雨霹靂に見舞われたものと思うほかはないという考えが、彼をいっそう絶望的な憤りへと駆った……。怨恨が長く君主に向かい得ないとなると、勢い、君側の姦臣に向けられる。彼らが悪い。確かにそうだ。しかし、この悪さは、すこぶる副次的な悪さである。……彼ら小人輩は、怨恨の対象としてさえ物足りない気がする。彼は、今度ほど好人物というものへの腹立ちを感じたことはない。これは姦臣や酷吏より始末が悪い。……弁護もしなければ反駁もせぬ。心中、反省もなければ自責もない。同じ阿諛迎合を事としても、杜周のような奴は自らそれと知っているに違いないがこのお人好しの丞相ときた日には、その自覚さえない。....こんな手合いは恨みを向けるだけの値打ちさえもない。司馬遷は最後に忿懣の持って行きどころを自分に求めようとする。

この小説からも示唆されることであるが、報復攻撃を制限する2つの原因が考えられる。第1は本来の対象者がその場にいなくなっている場合や実体のない非人間的原因(例えば疾風暴雨霹靂などの異常気象)であり、第 2 はひどい仕返しが予想される場合(例えば皇帝のような絶対権力者)である。このような時、後続する別の低強度の怒り触発対象(例えば君側の姦臣、酷吏、小人輩、お人好し)に強い攻撃反応が向けられる可能性がある。これを Pedersen, Gonzales, Miller(2000)は「触発置き換え攻撃(triggered displaced aggression)」と名づけた。低強度の怒り触発刺激は、それ自体は曖昧で刺激としては弱く、単独では攻撃行動を触発することはない。しかし本来の怒りによりプライミング(かき立てられ、方向づけられ)さ

れた場合、低強度の刺激が攻撃対象として鮮明なものとなるのである。本来の対象に報復できず怒りに震えている時、些細な出来事(例えば自分を苛立たせたり、がっかりさせたりするような他者の言動、混雑に巻き込まれて他の人とぶつかったりする場合)に遭遇すると、その些細さとは不釣り合いの強い攻撃反応を引き起こすことがある。

Pedersenらはこのようなプロセスを実験によって明らかにした。この実験ではまず怒りを発生させる(プライミング)操作を行った。実験参加者にはアルファベットを並べ替えて意味のある単語を作成するアナグラム課題(tenlis → silent、listen)が与えられ、5分でできるだけたくさん回答するように言われた。「怒り条件」では、実験参加者は低強度の耳障りな音楽(ストラビンスキーの春の祭典)を聞きながら難しいアナグラム課題を行った。その課題終了後、実験者は実験参加者の問題解決能力と努力について侮辱するような発言をした。実験者は実験参加者の成績が掲載されたデータを見て、怒りに満ちた表情で、イライラしながら、「あなたの成績は平均値よりも劣っていた。あまりにも成績が悪いので、あなたについては再実験をしなければならなくなった。再実験をするのは全く時間の無駄。次の実験をしなければならないのに困ったものだ。」と言った。一方、「怒り無し条件」では、実験参加者は低強度の穏やかな音楽(バッハのブランデンブルグ協奏曲第3番のジャズ・バージョン)を聞きながら易しいアナグラム課題を行った。また実験参加者の成績は普通だったと伝えられ、実験者から侮辱されることもなかった。

この手続きの後、触発(trigger)の操作が行われた。ここでは黒人女性のアシスタントが15のクイズ問題を読み上げるビデオ映像が提示された。実験参加者はそのクイズ問題に解答しなければならなかった。「触発条件」ではそのアシスタントがクイズ問題を早口で読み上げ、言葉や名前を間違ったり、問題番号と解答番号がずれたりしていた。また実験参加者のクイズの成績も平均より劣っているとの情報も与えられた。しかしそのことによって実験者から侮辱されることはなかった。「非触発条件」ではアシスタントは問題をゆっくりと読み上げ、発言の間違いもなく、問題番号と解答番号がズレることもなかった。また実験参加者のクイズ成績は平均レベルであると言われた。もちろん侮辱されることもなかった。解答終了後、実験者は「このアシスタントは次学期の有給のアシスタントに応募していて、審査委員は彼女のパフォーマンスについての情報を集めている」と伝えた。この情報は匿名で評価者が特定されることはないことも説明された。実験参加者は有給アシスタント候補者の動機づけ、知能、労働倫理、専門家としての意識について評定するように求められた。加えて有給アシスタントとしてどの程度推薦できるかについても問われた。実験の結果、「怒り条件」と「触発条件」が組み合わされた時、アシスタント候補者に対する攻撃レベルが高かった。すなわちアシスタント候補者の動機づけや、知能、意識が低く、有給のアシスタントとしてふさわしくないと回答する傾向が見られた。また、例え触発されても、本来の怒りのレベルが低ければ、アシスタントに対する攻撃レベルが高くなることはなかった。逆に触発されなければ、本来の怒りのレベルが高くても攻撃傾向が強くなることはなかった。このことはフラストレーションにより閾値が下がって(我慢できなくなって)いるところに、ちょっとした出来事が起きると攻撃の閾値を越えてしまうことを示唆している。この研究は全く罪のない対象が攻撃されるのではなく、本来の怒り刺激より強度が低い対象が攻撃されること、本来の怒り刺激がなければ触発刺激だけでは攻撃反応には結びつかないことを明らかにした。

このようにPedersenらの研究は報復攻撃が制限されているときの、いわば「鬱憤ばらし」のメカニズムを明らかにした。そして鬱憤のばらしの矛先をアシスタント候補者というコントロール可能な特定の他者に向けることが明らかになった。アシスタント候補者の運命は実験参加者にある程度握られているのである。このようにコントロール感は本来の原因とは異なる特定の対象に攻撃衝動が向けられることによって回復されることが明らかになった。

それではどのような対象を選択しイメージすることがコントロール感の回復に効果的であろうか。従来のスケープゴート研究によれば、報復される危険がないマイノリティーや弱者ということであるが、それは正しいのであろうか。イメージする敵対対象の性質によってコントロール感が影響を受けるのであろうか。

先述したように、われわれは環境をコントロールしようと動機づけられている。しかしわれわれの人生は多くの災難や不幸に見舞われ、予見不可能でままならないものである。この脅威を小さくし、コントロール感を維持するために、人は不幸の様々な原因を少数に絞ることが考えられる。その対象となるのが特定の個人であり集団(スケープゴートとなるような敵対対象)である。「権力は腐敗する」という表現も、その権力を倒した側や批判する側が、旧権力(敵)こそが社会に数々の不幸をもたらした主要な原因であると特定することによって、自分たちのコントロール感を高めようとする心理メカニズムとも考えられる。敵の存在は、広範囲にわたる予見できないリスクに満ちた環境をより、コントロール可能なものとして知覚させるのに都合が良い。例え、敵の影響力と厄災との関連が明確ではなくても、コントロール感を喪失した人はそれを回復しようとして不幸の原因を過剰に敵に帰属することもありうる(Douglas, 1966)。すなわち、人々が曖昧で脅威に満ちた状況に置かれた時、ある敵を見出し、脅威の源がもっぱらその敵にあると見なし、強大な力があると思い込む。

そのことにより状況が理解しやすくなり、コントロール感を回復できると考えられる。アメリカ人の7割が人生の中である時期に敵(同僚、恋敵)がいて、その人から目標達成を妨害されたり、傷つけられたりしたと報告しているそうである。人々は文化を越えて敵の存在を意識していることも明らかになっている(Adams, 2005)。

Sullivan, Landau, & Rothschild(2010)は敵対対象の性質とコントロール感の関係を明らかにする実験を行っている。彼らは、敵の得体が知れなく、また強いと感じられるほど、諸悪の根源はこの敵にあると思うことができるため、世界を理解しやすくなり、コントロール感が強くなると考えた。それに対して敵の力が明確か、あるいは弱ければ、様々な悪い出来事や不幸をその敵が引き起こしているとは考えにくい。そのためにコントロール感が相対的に低くなると予測した。Glick(2005)は能力があって邪悪だとのステレオタイプを持たれている集団は、脆弱な集団よりスケープゴートとして選出されやすいと述べている。ナチスはユダヤ人の銀行や産業、メディアの強い影響力を引き合いに出しながらドイツを崩壊させたユダヤ人の世界的な陰謀を非難した。

Sullivan らは、このような考えに基づき、統制感に対する脅威と敵のタイプを実験的に操作した。統制感に対する脅威は実験参加者が容易にはコントロールできない状況(自然災害、病気、投資、旅行中のリスクなど)を想起させる「統制困難」条件とコントロールが容易な状況(テレビの視聴時間、デート相手の選択、音楽の選択など)を想起させる「統制容易」条件であった。敵のタイプは、「曖昧で強力な敵」、「明確で強力な敵」、「弱い敵」の 3 種類であった。実験者は信憑性が高いオンラインのニュース雑誌を読んでもらうとして、実験参加者に 3 種類の記事を読ませた。記事はテロ組織のアルカイダに関するものであった。「曖昧で強力な敵」条件の記事は、アルカイダは強力な敵で、しかも将来彼らがどのような活動をするのか、当局も正確な情報をつかんでいないという内容であった。またアルカイダは発見されない巧みな能力を持っており、この敵と戦うのは想像以上の難しさがあるとの記述もあった。それから添付された写真は影のようなぼんやりしたものであるが、ライフルを持ち砂漠の岩の上で身構えた典型的なアラブ人テロリストであった。一方、「明確で強力な敵」条件の記事は、アルカイダは強力な敵であるが、その強さ、アジトの場所、将来の活動についての情報を政府当局が掴んでいるというものであった。それに添付された写真は外国のテレビに映った鮮明なものでライフルを持っていた。「弱い敵」条件では、アルカイダは弱い敵で、技量、支援者、テクノロジーに関して低レベルで、アメリカに対しても米軍に対しても大した脅威にはならないというものであった。写真は冴えないアルカイダのリーダーのものでインタビューの時のおどおどした表情を映したものであった。

実験の結果、「統制困難」かつ「曖昧で強力な敵」条件の時にのみ、日常生活でのリスク認知が低下し、統制感のレベルが高くなることが明らかになった。すなわち人生の中でどうにもならない出来事を想起した時、曖昧で強力な敵を意識すれば、その敵とは無関係の将来のリスク(失業、搭乗した飛行機がひどい乱気流に巻き込まれる、病気、など)を低く見積もり、コントロール感が高くなることが明らかになったのである。敵が強力でも明瞭であったり、弱かったりすればコントロール感の高揚には役に立たないことも示された。この研究は、スケープゴートの対象としては、イメージが曖昧で強そうな人や集団の方が、人々の心の安定にとっては役に立つことを示唆している。

マスメディアは連続殺人などの凶悪犯罪が起きると犯罪者の異常な行動につい大々的に報道する。これは社会の敵のイメージ作りに貢献しているとも言える。コメンテーターは何か事件が発生した時、「信じ難い行為」「人間ではない」という言葉を繰り返すことがある。これも敵の像を巨大化させ、そのことにより人々の統制感を高めることに貢献しているとも考えられる。この意味で人々にとって諸悪の根源である敵の存在は必要不可欠であり、もし敵が消えた場合、次の新たな敵を見出さなければ統制感が失われてしまう可能性がある。

コントロール感を高めるもうひとつの有力な方法は擬人化(人為化)である(Epley, Waytz, & Cacioppo, 2008)。イヌ、ネコのみならず、爬虫類にも「心」を見出している飼い主が多い。それは、われわれが動物やロボットを擬人化することによって理解し、コントロール可能なものとしてとらえようとするからであろう。また日食のような天体現象でさえも、昔は人間のような意志を持った超自然的存在によって説明された。それに対して、現代は数学により定式化された物理法則で理解する。その意味で神と数式を入れ替え、より都合のよいもっともらしい説明をしているとも考えられる。いずれにしても人為化は不明瞭な世界を理解するのに都合が良いのである。人知が及ばない世界を人知が及ぶ世界に転換するには人為化することが手っ取り早い。星座や台風に人間の名前をつけたり、幻に幽霊を見て人為化するのは人が環境を何とか理解しコントロールようとする努力の現れであるとも考えられる。また大災害が起きるとマスメディアは「これは災害ではなく人災だ」と報道することが多い。どのような自然災害もそれに関わる人や部署はあるので、先述した「触発置き換え攻撃」の対象を見出すことは容易である。そして、この人為化には文化の違いも見出されている。日本は擬人化に対する許容度が高い国であり、アメリカは低い国であることがわかった。アメリカ人の類人猿研究者は日本人研

究者がサルを擬人化することを批判するそうである。アメリカ人は意識してそれを避けるが、日本人研究者は擬人化に対してそれほど抵抗がなく、また現象の理解に役立つため意図的に行っている面もあるということである(Asquith, 1996)。

以上述べたように、スケープゴーティング理論は主に、内的な罪の意識の抑圧と投影のプロセスを説明の柱とする精神分析学的理論と欲求不満を別のターゲットに向けるプロセスを主旨とする欲求不満攻撃理論がある。前者は要するに自分の道徳的価値を維持するために行うものであり、後者はコントロール感の回復を試みるものである。Rothschild, Landau, Sullivan,& Keefer(2012)はこの2つのプロセスがそれぞれ独立したものであると主張している。彼らはコントロール感回復のためのスケープゴーティングは道徳価値の維持とは違うと考えた。人が災害や危機のようなコントロールできない環境に置かれた場合、例え罪の意識を感じていなくてもコントロール感を回復しようとして、事態を理解するように努めた結果、スケープゴートを見出すこともあるうる。

Rothschild らは環境破壊の問題を取り上げ、それが自分達の不注意な行動によるものとプライミングされた実験参加者(道徳価値脅威条件)はプライミングされていない実験参加者に比べて石油会社をスケープゴートにする傾向が強くなると考えた。すなわち、環境破壊の責任を石油会社に帰属すると同時に、石油会社を罰すべきだと考える傾向が強くなると予測した。そしてこの効果は罪の意識によって媒介されると推測した。また、環境破壊を実験参加者の力が及ばない未知の原因によるものとプライミングされた実験参加者(コントロール脅威条件)はそうでない実験参加者より、道徳価値脅威条件と同じく、石油会社に責任を帰属し罰すべきだと報告するのではないかと考えた。ただし、この場合は、罪の意識ではなくコントロール感によって媒介されると推測した。道徳的価値脅威条件の操作は環境破壊を引き起こしている日常行動やライフスタイルを想起させるような文章(例えば、歩くことができるような場合でも自動車、バイク、公共交通機関を使う、洗濯物を干して乾かすことができる場合でも乾燥機を用いる)を実験参加者に読ませることによって行われた。一方コントロール脅威条件では、「災害は人知を越えた未知の原因により引き起こされる環境破壊に由来する」といった内容が記述されている文章が提示された。また無脅威条件の実験参加者は「大学生の生活スタイルに対する大学当局の認識と学生の実際の生活とのギャップを評価する調査」に参加するものとして説明された。

実験の結果は予想通りとなった。環境破壊を想起しなかった実験参加者と比べて、個人的に環境破壊に道徳的責任があると感じるようにプライミングされた実験参加者、あるいは環境破壊の原因が人知を越えたもので、コントロール感を持つことができない実験参加者は、両者とも石油会社に責任を帰属した。そして石油会社を罰したいという願望をもつことが明らかになった。さらに、この 2 種類の動機は別々のものであることも明らかになった。このことはスケープゴーティングの対策を考える場合、どちらの動機が優勢であるかを前もって明らかにすることが必要であることが示唆された。

スケープゴーティングの促進要因

スケープゴーティングには他者の行動やスケープゴーティングの有効性、ターゲットの性質、スケープゴーティングをする側のパーソナリティなどが影響することが考えられる。図1の(D)は他者、あるいは他集団のスケープゴーティング行動を見て、それに影響を受けることを示したものである。ジェノサイドやいじめなど集団によるスケープゴーティングは同調や服従などの社会的影響によって発生している可能性がある。一旦他者に同調したり、命令や指示に従ってスケープゴーティングが行われると、自分たちの行動を合理化するためにターゲットとなったスケープゴートを蔑視したり、邪悪性を誇張したりして、さらにひどいスケープゴーティングを行う可能性もある。(E)はスケープゴーティングによって、個人や集団の自尊心を維持したり、安心感を高めたりするプロセスがあることを示したものである。外部にスケープゴートや敵を作りそれと対峙していると思えば内集団の凝集性は高まり、昂揚感に包まれることもある。また社会や集団の安寧も保たれることになる。このようにスケープゴーティングが効果的であれば、ますますそれを行う傾向が強くなることが考えられる。(F)はスケープゴートの対象となる人や集団の特徴について言及した部分である。スケープゴートの対象となりやすいのは先述した道徳観やコントロール感の回復に役立つ人や集団であることが考えられる。投影や置き換えが容易で、不安や自尊心を回復しやすい対象が選ばれるであろう。具体的には第1に多数者から嫌悪感を持たれている異質者・異端者である。これは歴史的・精神的・身体的特徴による。キリストを殺したとされるユダヤ人が差別の対象となり、中世ヨーロッパでは幻覚・妄想など重い精神症状を持つ人が魔女裁判にかけられた事例が少なくなかったということである。第2は攻撃しても安全な対象である。マイノリティーや弱者(例えば、不況時のドイツユダヤ人、9.11 同時多発テロ発生時のアメリカのアラブ人、学級の中のイジメられっ子)は多数者の恰好のターゲットとなる。

ただし、完全な弱者はコントロール感の回復には役に立たない。コントロール感の回復には相手が強い方が効果的である。ただし、強い報復があれば困るので、報復を回避しながらスケープゴーティングを行う必要がある。

その意味では、最も良いターゲットは、過去において強者であった者や反撃が封じられている強者である。例えば王侯貴族や上流階級、権力者は革命や敗戦によって社会体制が変わると処刑されたり追放されたりする。フランス革命ではルイ16世がギロチンにより公開処刑されたり、ルーマニア革命ではチャウセスク大統領が殺害されその無惨な写真が公開されたりした。またドイツ敗北後、ヨーロッパ全域でナチスやその協力者に対する激しい追及が行われた。特に憎悪の対象となったのが、対独協力者で、群衆の面前でリンチされたり、絞首や銃殺により処刑された。また金持ちや成功者、大企業の不祥事はマスメディアの恰好の攻撃対象になる。聴覚障害のため日本のベートーベンと賞賛された作曲家のウソや新しい万能細胞を作製したとされた若い女性研究者の論文剽窃に関してメディアによる大量報道がなされた。このような対象を攻撃することは自尊心の向上に効果的なのである。すなわち今まで攻撃が許されなかった強者に立ち向かうことにより、弱者や正義の味方をしたという自己満足と過去のねたみや恨みを晴らしたという充足感を味わうことができるのである。また、先述した弱者(ユダヤ人、アラブ人、イジメられっ子)も攻撃する側にとっては完全な弱者ではない。ナチス時代のユダヤ人は当時ドイツの経済を牛耳っていて、ドイツ社会を崩壊させる意図と力を持っていると考えられた。魔女も中世ヨーロッパでは得体の知れない不気味な力を持っていると思われていた。9.11の時のアラブ人もテロの意図をもっていると恐れられた。イジメもイジメる側はイジメられっ子によって何らかの被害を受けていると思っている。このように多数者の妬みや羨望あるいは嫌悪の対象であり、攻撃しても反撃されない対象についてスケープゴーティングは行われるのである。

また、実際の敵対者や関係者もある意味でスケープゴートとなる。戦時には敵の兵士を人間以下の者と見なしたり、非道徳的、残虐な悪魔との宣伝がなされることもある。戦時中、敵の醜くデフォルメされた姿のポスターが米英でも日独でも多数作成されていた。現実の葛藤や紛争が差別や偏見を増大させることは大戦中のアメリカの日系人差別などに現れている。この意味で実際の敵とスケープゴートの間に明確な線引きをすることは難しいところもある。ただし両者とも同じような心理的メカニズムが働いていることが考えられ、前者が後者に容易に転化することもありうる。

(G)はスケープゴーティングをする側の特徴を示したものである。Adorno, Frenkel-Brunswik, Levinson, & Sanford(1950)は次のような権威主義的性格の人が差別的言動を行う傾向があると指摘している。

*厳格で頑固な信念を持っている
*価値体系がありふれた紋切り型である
*自身を「弱い」と見なされることに耐えられない
*伝統的な社会的慣例の違反は許せないと思っていて、違反者を理解しようとはしない
*特に未知なことに対して疑いを持つ
*権威には大きな敬意を払い、秩序に対してよく服従する

その他、社会的ヒエラルキーの維持にこだわる社会的支配傾向(Sidanius & Pratto, 1999)も関連しているということである。戦争や革命、災害などで社会の支配構造が揺らいだ時、このような態度を持っている人は容易にスケープゴーティングを行うことが予想される。

マスメディアの報道特性

現代は人間の全ての経験を対象化し商品化する「ファスト(即席)資本主義」とも言われている(Agger,1989)。生では体験できないような事柄も快適な居間でテレビのリモコンのボタンを軽く押すだけで見ることができる。ニュースはその制作者が売ろうとする重要な商品のひとつであり、視聴者が多ければ多いほど制作者の利益になる。商品であるからメディア企業やスポンサーの利益や意向もニュース選択に影響しているが、主に視聴者の興味に基づいて、報道すべき内容とそうではない内容がふるいにかけられる。視聴者が放送内容や記事に関心を示せば、メディアの担当者はこれを良い商品としてみなし、関連するニュースを流し続け、視聴者の関心を引き続けるように努力する。もし視聴者がニュース内容に興味を示さなかったり不満足であったりした場合には別のニュースと入れ替えられる。報道の送り手と受け手は絶えずやりとりしながらニュース内容の選択を行っているとも言える(Chiricos, Padgett, & Gertz, 2000)。

そして、その選択は科学的根拠に基づくものではなく、ジャーナリストの職業上の慣例、制約、イデオロギーのような外的な要因と感覚や直感によって行われている。そのため編集局の中でニュースの価値について詳細な議論がなされることは滅多にないということである(Randall, 2000)。これには時間的制約もあるかもしれない。またメディアは現実をそのまま伝えるのではなく、題材を選択したり、形を整えたりすることによって、ニュースとして表現している。形を整える際に内容を削り圧縮し、単純明瞭で消費者(視聴者や読者)に好まれるようにするのである。そしてそれはステレオタイプと一致していることが多い。また実際は不明瞭な事象の起承転結のストーリーを作り、また多数者の意見や観点を強調し権威づけもする。そのため、往々にしてニュースは現実とズレた主観的なものになり、主観を客観にいかにうまく結びつけるかがジャーナリストの腕の見せ所となっている面がある。要するに、ニュースはリアリティを社会的に構成し直したものと言え

る(Staab, 1990)。

そしてニュースの選択基準やニュースとしての価値判断は、担当部署の先輩から後輩に受け継がれる以心伝心のものであるらしい(Harrison, 2006)。様々な研究者(例えば、Galtung & Ruge,1965; Golding & Elliott, 1979; Staab, 1990)がニュース選択のいくつかの基準を提示しているが、それを集約すれば下記のようになる。

1)ネガティブさの程度　悪いニュースは良いニュースと言われる。ニュースはドラマとショックをもたらし、聴衆にとって魅力的である。
2)重要性　多くの聴衆にとって関連があったり、重要な出来事が取り上げられる。
3)近接性　文化的、地理的近接性が高いものがニュース価値がある。
4)サイズ　多くの人が災害に巻き込まれたり、出来事に大物が関わっているほど取り上げられる。
5)閾値　強度が強く、センセーショナルな内容のものが選択されやすい。
6)ドラマ化　葛藤闘争として劇画化される。
7)視覚的魅力　テレビ映りや外見の良さ、あるいは逆に外見の醜悪さが考慮される。
8)娯楽　視聴者の楽しみと憂さ晴らしに役に立つ娯楽的価値が高いほど選択されやすい。風変わりな出来事、子ども、動物、セックスなどが対象になりやすい。
9)最新情報　特ダネやスクープなど予期できない、あるいはまれにしか起きないことが取り上げられやすい。
10)エリート　ビッグ・ネーム(著名人、権力者)は聴衆を引きつける。
11)個人化　複雑な出来事や問題を個人の行動に還元する。
12)簡潔　複雑な出来事を担当者が単純化し、明確に理解・解釈できれば、取り上げられる可能性が高い。
13)連続性　既にニュースになっている出来事は選択されやすい。よく知られており解釈が容易なため。
14)メディアの好み　記事が新聞社や放送局の好みに合っている。
15)頻度　ニュースメディアの発刊・放送のサイクル内で繰り返し起きる出来事が放送されやすい。長期にわたるものは取り上げられない。
16)構成　新聞や放送の構成やバランス(紙面の配置や放送時間)が考慮される。

上記の1～5までは視聴者の興味や欲求不満が強いものを選出することに関連する項目であろう。先述した欲求不満のモデルに当てはめれば(A)や(C)の所に該当する。次の6～9の項目は視聴者の興味をさらにかき立てたり、関心を高めることに関連している。10～13は高まった欲求不満を特定の対象に導くプロセスに関連している。すなわちスケープゴーティングの対象を明確化する働きを示している。ただし、対象が定まったとしてもメディア側の要請や都合で、ニュースとなるかどうかが左右される。14～16はそれに関連する項目である。このようにメディアは視聴者の興味を引き、欲求不満を高めるようなニュースを取り上げ、さらにそれをかき立て、そのエネルギーをある焦点に導き、最終的にはメディアの都合により加工処理するということになる。このようなマスメディアのニュース選択行動や偏向がスケープゴートを生み出す土壌になっている可能性がある。

犯罪や生活保護の問題は先述のニュース選択基準を満たしているものが多い。例えば、尼崎殺人死体遺棄事件では、10 名以上の人が暴力や虐待により殺害されたり、行方不明になったり、自殺したりしている。そして主犯格の女は獄中で自殺した全く異常な事件であった。また生活保護費の不正受給のニュースも枚挙の暇がない。その多くが、高級車を乗り回したり、贅沢三昧の暮らしをしていながら、保護費を受給していたというものである。このような異常な例がマスメディアによく取り上げられる。

異常な振る舞いをする対象には人は意図や感情を持つものとして認知することがわかっている。Epley,Waytz, Akalis, & Cacioppo(2008)は予想できないような行動をする犬と予期可能な行動をする犬のビデオを見せた後、その犬がどの程度、感情や意思やパーソナリティを持っているか、バクテリアと人間のどちらに近いかなどについて尋ねた。その結果、予想外の行動をする犬を感情や意志を持っている人間に近い存在だと考える傾向が見られた。ゆえに人の場合も異常性を強調すればするほど、対象人物の意図やパーソナリティがクローズアップされるであろう。そのため視聴者は検察官になったような気分で対象人物を弾劾する。その結果、事件の背後にある複雑な歴史的、制度的、政治的、経済的背景は無視されることになる。特にテレビはその傾向が強く、貧困の問題に関するアメリカ CBS のニュース番組を分析した研究によれば、その 7 割が特定の個人に注目したものであった。犯罪についても同様であった(Iyengar, 1991)。

村上(2009)は殺人事件の実際のデータと新聞の報道量と人々の犯罪についてのイメージの 3 者を比較して、そのズレについて吟味している。具体的には朝日新聞データベース、読売新聞縮尺版 CD-ROM、毎日新聞縮尺版CD-ROMを用いて、「殺人」「殺害」を含む543記事を抽出し分析対象とした。543 記事の事件のそれぞれについて、被害者の属性(年齢、性別、国籍、職業)、加害者の属性(年齢、性別、国籍、職業)、加害者の人数、加害者と被害者の関係、動機、殺害の方法、場所の 13 項目を調

査した。さらに警視庁統計局の「平成 12～15 年の犯罪」をコーディングした 13 項目について調査し、新聞の報道傾向と実際の犯罪傾向を比較した。さらに大学生を対象に質問紙調査を行った。この調査では、殺人事件の 13 の属性について、「殺人事件の被害者のうち、何%が男性だと思いますか」といったように、分布を推定して百分率で回答してもらった。そして新聞の報道傾向や実際の犯罪傾向と比較した。

その結果、①稀な特徴を持つ事件が過大に報道される②ありふれた特徴を持つ事件が過小に報道される③社会に非常に大きいインパクトを与える犯罪が発生した場合、その事件が繰り返し報道されるだけでなく類似した特徴を持つ事件も報道されやすくなることが明らかになった。

①については、被害者が子供である、加害者が大勢である、被害者と加害者が親子であるといった事件が過大に報道されていたが、単に稀な特徴をもつといったこと以上に暴力的、残虐なイメージが強く、受け手の関心を引きやすいといった側面が報道に影響すると考えられた。

②については、統計上最も多い50歳代の被害者・加害者、無職の被害者・加害者、犯行の動機における突発的な犯行などが過小に報道されていた。ところで統計における被害者と加害者の性別については両方とも男性が圧倒的に多く、被害者が男性である事件は新聞では過小に報道されていたが、加害者が男性である事件ではその傾向が見られなかった。この点から被害者と加害者の取り上げられ方が全く異なることがわかった。

③については、コーディング期間中の記事に大阪教育大付属池田小学校で 8 人もの小学生が犠牲になった事件が含まれていて、その影響がいくつかの項目に表れたといえる。その事件自体が 2 年後、3 年後も取り上げられることもあったが、児童が標的になったその他の事件も多く報道され、統計的には少ないはずの小中学生が被害者である事件、10 歳以下の児童が被害者である事件が過大に報道される、という報道傾向が見られた。これらの傾向は、ニュースの送り手が読者を意識することによって生じていると考えられる。

それから、犯罪の主観的生起確率に関して、年齢や職業、被害者について、統計データよりも新聞報道に近いイメージが形成されていることが明らかになった。図3は被害者の割合について、質問紙回答（主観的確率）、新聞記事の割合、統計データ、人口分布について、男女別に比較したものである。この図からも主観的確率と新聞記事の割合の方が統計データよりも近い値を示していることがわかる。それから加害者の人数についても、1人の犯行の割合を低めに見積もり、多人数の犯行の割合を高めに見積もるという新聞報道に近い回答であった。この研究から、人々の犯罪についてのイメージは実際の客観的データより新聞の報道傾向に近いものになることが明らかになった。この原因として、先述したように、メディアと視聴者の双方向の影響が考えられる。メディア側は人々の犯罪のイメージに合うような事件を選択的に報道する傾向がある。またその時代において問題視されているテーマに沿った事件が繰り返し報道されるであろう。そのため、双方の利害が一致した場合は事実と異なった報道傾向が生じる可能性もある。

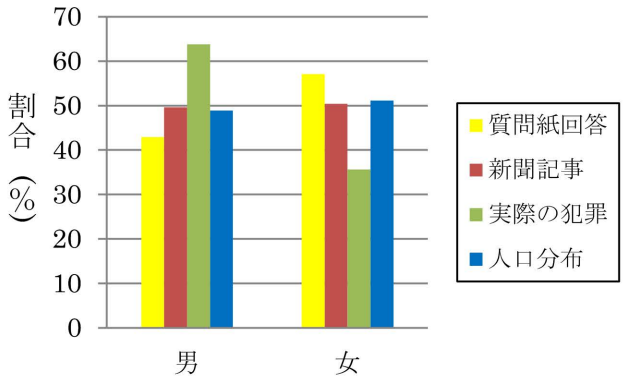

図3　殺人被害者の質問紙回答、新聞記事、実際の犯罪と人口分布

このように報道のあり方が人々の主観的判断にかなり影響していることは明らかである。そして、メディアは好んで異常な犯罪について報道する傾向があり、また人は、そのような人物を見た時、個人的帰属を行う傾向が強くなることは先述した通りである。犯罪や生活保護の問題を個人に帰属させるか社会に帰属させるかは社会政策の好みにも影響すると考えられる。個人に帰属させた場合、社会福祉に反対する傾向が強くなる。また犯罪を怠けや無責任、冷淡さによるものと判断する傾向と罰則強化に関する態度は正の相関があることが確認されている(Carroll, Perkowitz, Lurigio, & Weaver,1987)。いずれにしてもマスメディアが複雑な問題について個人に中心を置いた報道を行い、スケープゴート的対象を仕立て上げ、さらに社会的経済的背景に配慮しないような報道を続ければ、社会の絆や信頼を低下させる可能性がある。このようにニュースの消費者の興味を引き、繋ぎ止めるために犯罪報道に過剰に力を入れることは、様々な副作用をもたらすであろう。

時間経過とスケープゴート対象の変遷(波紋モデル)

災害や事故が発生するとメディアは一斉に悪者探しをする傾向があることは先述した通りである。そして探し当てた悪者が非難するに値しない場合、あるいはその悪者だけを非難しても欲求不満を解消できない場合、次のタ

ーゲットが必要になる。このようにして次々に非難対象が変遷することもある。このようなことを明らかにした古典的研究としてVeltfort & Lee (1943)のものがある。彼らは1942 年にボストンで発生したナイトクラブ火災事故の事例研究を行っている。この事件では最初のマスコミの非難攻撃のターゲットとなったのは誤ってデコレーション・ツリーに火をつけた 16 歳のアルバイトの少年だった。しかし、その少年は母親が病気がちで家計を助けるために働いていて、しかも学業成績が優れる真面目な少年だったことが判明すると次にターゲットになったのは、明かりにいたずらをした者であった。しかし結局、身元がわからずじまいであった。その後、消火設備を点検して許可した消防署、防火検査員、消防署長、現場に居合わせた警察官、警察署長、防火規則を作った市議会、監督責任がある市長など次々にターゲットになった。そしてナイトクラブのオーナーは利益優先で人命を軽視した守銭奴として非難された。

このようなメディアの報道傾向に関して Chyi & McCombs(2004)は議題設定の第2水準効果を提唱している。議題設定効果とは，ある話題や対象がメディアに強調されるほど、受け手側でその話題や対象に関する重要度の認識も増大するというものである(張, 2000)。メディアは毎日発生している多くの出来事から、話題を取捨選択し、記事数や放送時間を配分することによって重要度の格付けを行いながらニュースを制作・伝達している。受け手はメディアに対してある程度信頼感を持っているため、ニュースで頻繁に取り上げられた話題を重要な話題であると認識する(McCombs & Show, 1972; 竹下, 1981)。要するにメディアが設定した世界像(特にニュース頻度)が受け手の世界像をある程度規定してしまっていることが考えられる。それから第2水準効果とは、メディアが出来事の異なった面を取り上げ強調し、再フレーム(新しい枠組みで対象をとらえる)することを意味する。物語を生き残らせ、フレッシュにして受け手の注意を引き続けるためには、この再フレーム化が必要となる。非難対象が次々と変遷するのも、物語を生き残らせるための方略の1つであろう。

Chyi らは、再フレーム化が時間と空間の 2 次元に関わっていることを示唆している。彼らは空間を①個人、②コミュニティー、③地域(大都市圏、州)、④社会(国家レベルも含む)、⑤国際の 5 水準に分類している。また時間を過去、現在、未来に分類している。そして新聞記事をこの基準に従って分類した場合、この2つの次元の組み合わせがどのようになっているのかを確認するための分析を行っている。彼らは 1999 年にアメリカのコロラド州コロンバインで起きた高校での銃乱射事件の記事を分析している。この事件では 12 名の生徒と 1 名の教師が射殺され、犯人の生徒 2 人は自殺した。重軽傷者は 24 名であった。分析の対象となったのは 1999 年 4 月 21 日～5 月 20 日の 1 ヵ月間の記事であった。分析の結果、記事の52%が社会に関するものであり、29%がコミュニティー、17%が個人、2%が地域、1%が国際に関するものとなっていた。また社会に関する記事の割合は最初の 25 日間で 38%から 76%に増大し、逆に個人は最初の 30%から0%に低下した。このことは記事の焦点が個人的な情報から社会的な問題へ変化していることを示唆している。

波紋モデル

このような研究から釘原・植村・村上(2007)は波紋モデルを考案した。これは水面に石を投げ入れた時に、そこから波が発生し四方八方に拡散していくような状況のアナロジーである。図 4 の左の図はモデルを上から見たものであり、右の図はその断面を示したものである。

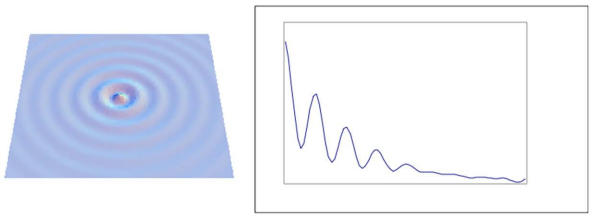

図4 波紋モデル

このモデルでは質と量の両面を考慮する。事件直後にはその衝撃によって大きな波紋が発生する。振幅の大きさは攻撃エネルギーの量であり新聞記事の数(量)に反映される。時間が経過するに従って波の振幅は次第に低下していく。全体的にはこのような経過をたどるのであるが、途中で記事数が若干増大したり減少したりすることを繰り返す。途中で記事が増大するのは、その出来事から1週間、1ヶ月、1年というような記念日的な日であったり、事件や事故の重大な手がかりや新たなスケープゴートが発見された場合である。もちろん他の大きな事件が発生するとその波動エネルギーによってエネルギーが低下してしまう。

質的な面に関して本モデルは非難攻撃の対象(スケープゴート)の変遷について言及する。波紋の同心円の中心に近い所ではその振幅エネルギーが狭い範囲に集中している。この狭い範囲を個人(攻撃の対象人物)とする。時間経過に従って次第に面積が広がり、中心から離れるに従って攻撃対象が個人から離れ、職場の同僚、職場のシステム、管理者、行政当局、社会、国家というように拡散して行く。中心からの面積が狭い場合、エネルギーは

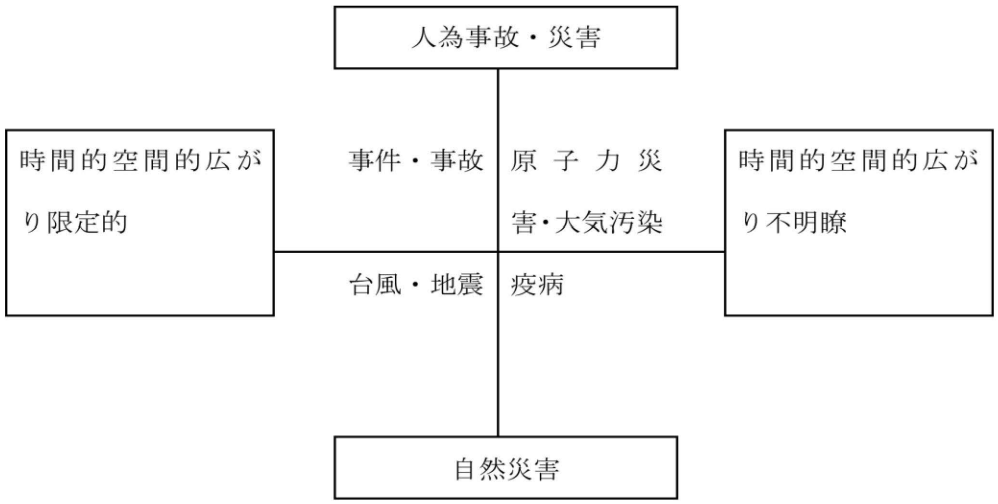

図5　災害分類モデル

狭い範囲（例えば個人）に集中しているが拡散するに従って１件当たりの攻撃エネルギーは低下する。一件当たりの攻撃エネルギーがあるレベルまで低下すれば新聞記事として掲載されたり、テレビで報道されるようなことはなくなる。

波紋の形状に関しては災害の種類が影響することが考えられる。災害の種類に関して、研究者によって様々な分類が行われている。例えば Kraus & Slovic(1988)は因子分析の結果、様々な災害のリスクを恐怖と未知性の２次元に布置できることを示した。例えば原子力発電事故は恐怖、未知性とも高く、戦闘は、恐怖は高いが未知性は低く、マリファナは、未知性は高いが恐怖は低く、酒は両方とも低い所に位置することがわかった。また Tobin & Montz(1997)は時間と空間の次元で災害の分類を試みた。発生までの時間が短い災害は、例えば洪水、竜巻、地震などがあり、時間が長いのは干ばつ、寒波などを挙げている。空間に関しては、広範囲に及ぶ災害として、干ばつ、寒波、そして集中するものとしては、化学物質の流出、脱線などを挙げている。それから Taylor(1987)は災害の分類次元として原因と発生場所を挙げている。原因は自然、産業、人であり、発生場所は地球、大気、火災、水、人々である。この２次元の組み合わせで様々な災害が分類可能だとしている。この中で例えば産業と大気の組み合わせ(産業&大気)の所に原発事故による放射能汚染、酸性雨、大気汚染などが位置し、(自然＆人々)の所に疫病、飢饉、(人間＆地球)の所に交通事故や列車事故、(自然＆地球)の所に地震や噴火、(自然＆大気)の所に台風、(自然＆水)の所に洪水、津波を位置づけている。

このような研究を踏まえてここでは図５のようなモデルを考案した。縦軸は人為的事故・災害 vs 自然災害の軸であり、横軸は時間的空間的広がりの程度を表す軸である。この図のどこに位置するかによって波紋の形状が異なると考えた。自然災害より人為災事故の方が責任追及が厳しくなされ、それに関する報道量も多くなることが予想される。そのため、責任追及の記事に関しては波紋の振幅が大きいであろう。また災害や事件の時間的空間的広がりも波紋の形状に影響するであろう。広がりが限定されたものであれば、災害の発生直後は多くの報道がなされるであろうが、時間経過とともに次第に減衰していくものと考えられる。波紋の図の右側の図はそれを示したものである。それに対して時間的空間的広がりが不明瞭であれば、明確な減衰パターンは観察されないことが考えられる。図５の右上の第1象限の災害は振幅は大きく、減衰パターンが明確でない波形を示すことが予測される。それに対して左上の第２象限の災害は、振幅は大きいものの時間経過によって減衰するものと思われる。左下の第３象限の災害は振幅が相対的に少なく、比較的明瞭な減衰が観察され、第４象限の災害は振幅も減衰も小さいことが予想される。

以上本稿は、スケープゴーティングに関する全体モデルを提示し、さらにスケープゴーティングを促進するマスメディアの特性とそれがもたらすスケープゴート対象の時間的変遷過程について分析・考察したものである。

引用文献

Adams, G. (2005). The cultural grounding of personal relationship: Enemyship in north American and west African worlds. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 948–968.

Adams, H. E., Wright, L. W., & Lohr, B. A. (1996). Is homophobia associated with homosexual arousal? *Journal of Abnormal Psychology*, 105, 440–445.

Adorno, T. W., Frenkel-Brunswik, E., Levinson, D. J., &

Sanford, R. N. (1950). *The authoritarian personality.* New York: Norton. (T.W.アドルノ, 田中義久, 矢沢修次郎 (1998). 権威主義的パーソナリティ 現代社会学大系 12 青木書店)

Agger, B. (1989). *Fast capitalism: A critical theory of significance.* Chicago: University of Illinois Press.

Allport, G. W. (1979). *The nature of prejudice.* Cambridge, MA: Perseus Books.

Asquith, P. J. (1996). Japanese science and Western hegemonies. Primatology and the limits set to questions. In L. Nader (Ed.), *Naked science: Anthropological inquiry into boundaries, power, and knowledge* (pp. 239–256). New York: Routledge.

Carroll, J. S., Perkowitz, W. T., Lurigio, A. J., & Weaver, F. M. (1987). Sentencing goals, causal attributions, ideology, and personality. *Journal of Personality and Social Psychology,* **52**, 107–118.

Chiricos, T, Padgett, K., & Gertz. M. (2000). Fear, TV news, and the reality of crime. *Criminology*, **38**, 755-785.

張寧 (2000). 三大紙の中国関係報道における議題設定効果の検証 －天安門事件を中心に－ 年報筑波社会学, **12**, 26-42.

Chyi, H. I., & McCombs, M. E. (2004). Media salience and the process of framing: Coverage of the Columbine school shootings. *Journalism and Mass Communication Quarterly,* **81**, 22–35.

Dollard, J., Doob, L. W., Miller, N., Mowrer, O. H., & Sears, R. R. (1939). *Frustration and aggression.* New Haven, CT: Yale University Press.

Douglas, M. (1966). *Purity and danger.* Baltimore, MD: Penguin Books.

Drabeck, T. E. & Quarantelli, E. L. (1967). Scapegoats, villains, and disasters. *Transaction,* 4, 12-17.

Epley, N., Waytz, A., Akalis, S., & Cacioppo, J. T. (2008). When we need a human: Motivational determinants of anthropomorphism. *Social Cognition*, **26**, 143-155.

Galtung, J., & Ruge, M. H. (1965). The structure of foreign news: The presentation of the Congo, Cuba and Cyprus Crises in four Norwegian newspapers. *Journal of Peace Research,* **2**, 64–91.

Glick, P. (2005). Choice of scapegoats. In J. F. Dovidio, P. Glick, & L. A. Rudman (Eds.), *On the nature of prejudice: Fifty years after Allport* (pp. 244–261). Malden, MA: Blackwell Publishing.

Golding, P., & Elliott, P. (1979). *Making the news.* London: Longman.

Gollwitzer, M. (2004). Do normative transgressions affect punitive judgments?: An empirical test of the psychoanalytic scapegoat hypothesis. *Personality and Social Psychology Bulletin,* **30**, 1650 –1660.

Green, D. P., McFalls, L. H., & Smith, J. K. (2001). Hate crime: An emergent research agenda. *Annual Review of Sociology*, **27**, 479–504.

Harrison, J. (2006). *News.* London: Routledge.

Hovland, C. I., & Sears, R. R. (1940). Minor studies of aggression: VI. Correlation of lynchings with economic indices. *Journal of Psychology*, **9**, 301–310.

Iyengar, S. (1991). *Is anyone responsible?* Chicago: University of Chicago Press.

Kraus, N. N., & Slovic, P. (1988). Taxonomic analysis of perceived risk: Modeling individual and group perceptions within homogeneous hazard domains. *Risk Analysis,* **8**, 435–455.

釘原直樹・植村善太郎・村上幸史 (2007). マスコミが対象とするスケープゴートの変遷(7) 波紋モデルのワイブル関数とコレログラムによる表現 日本心理学会第 71 回大会発表論文集, 194.

McCombs, M.E., & Shaw, D.L. (1972). The agenda-setting function of mass media. *Public Opinion Quarterly,* **36**, 176-187.

Mintz, A. (1946). A re-examination of correlations between lynchings and economic indices. *Journal of Abnormal and Social Psychology,* **41**, 154-160.

村上洋輔 (2009). マスメディア報道が犯罪加害者像に与える影響 大阪大学人間科学部卒業論文

Pedersen, W. C., Gonzales, C., & Miller, N. (2000). The moderating effect of trivial triggering provocation on displaced aggression. *Journal of Personality and Social Psychology,* **78**, 913–927.

Randall, D. (2000). *The universal journalist.* London: Pluto.

Rothschild, Z. K., Landau, M. J., Sullivan, D., & Keefer, L. A. (2012). A dual-motive model of the motives underlying scapegoating: Displacing blame to reduce guilt or increase control. *Journal of Personality and Social Psychology,* **102**, 1148-1163.

Sidanius, J., & Pratto, F. (1999). *Social dominance: An intergroup theory of social hierarchy and oppression.* New York: Cambridge University Press.

Staab, J. F. (1990). The role of news factors in news selection: A theoretical reconsideration. *European Journal of Communication*, **5**, 423–443.

Sullivan, D., Landau, M. J., & Rothschild, Z. K. (2010). The existential function of enemyship: Evidence that people attribute influence to personal and political enemies to compensate for threats to control. *Journal of Personality and Social Psychology,* **98**, 434–439.

Tajfel, H. (1981). *Human groups and social categories: Studies in social psychology.* Cambridge: Cambridge University Press.

竹下 俊郎 (1981). マス・メディアの議題設定機能 -研究の現状と課題－ 新聞学評論 30, 203-218.

Taylor, A.J. (1987). Invited review: A taxonomy of disaster and their victims. *Journal of Psychosomatic Research,* **31**, 535-544.

Tobin, G. A., & Montz, E. (1997). *Natural hazards: Explanation and integration.* New York and London: The Guilford Press.

Veltfort, H. R. & Lee, G. E. (1943). The Cocoanut Grove fire: A study in scapegoating. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **38**, 138-154.

Definition and mechanism of scapegoating

Naoki KUGIHARA (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

The scapegoating was typical kinds of collective attribution of causes and responsibility and blaming a certain targets when people perceive that negative events occurred in past or will occur in the future. The targets of scapegoating may be selected on the basis of ambiguous or no causal relationship to the negative event. Here I proposed a total scapegoating model and discussed characteristics of mass media publicity. And finally, a scapegoat transition model (the ripple widening model) was presented.

Keywords: scapegoat, mass media, ripple widening model, blame, frustration-aggression theory, defense mechanism.